

## 『論理哲学論考』をいかに読むか

### ——ラッセル的アプローチ——

高村 夏輝

#### 1. 「分析哲学」の正史？

分析哲学を現代の他の哲学の伝統（たとえば現象学）から区別する特徴は何か。これにはさしあたり「分析」を哲学的考察の方法とすることと答えることができるだろう。しかし、何を「分析」するのか、あるいは「分析」とはどのような作業なのかを問うなら、これに答えることは容易ではない。ただし、「言語的意味（あるいは概念・思想）を記号論理学の手法を用いて明晰化すること」がその答えの有力な候補になることには、異論がないであろう<sup>1</sup>。

しかしこのように「分析」を理解するときには、分析哲学の歴史の初期段階には一種の不純さが認められることになるだろう。この伝統の始祖、フレーゲこそ純粋な「分析」作業に従事していたと言えるが、第二の始祖ともいべきラッセルが、イギリス経験論哲学の伝統に従い、言語分析に認識論的問題関心を持ち込んでしまった。しかも、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』（以下、『論考』と略し、参照指示は文番号によって行う）において、フレーゲの影響の下、認識論的議論を持ち込まずに言語・意味の分析を行ったにもかかわらず、ラッセルと同じく認識論的関心に導かれた論理実証主義者が『論考』を誤読し、ラッセルと『論考』を一括りにしてしまった。その後、検証主義の批判やアメリカにおける論理技法のスコラ的发展を経て、ようやく浄化された分析哲学が成立した、このように理解されることになる。

こうした理解が通俗的な哲学史に登場することは驚くべきことではないが、精緻にテキストを読み解くべき個別の著作の研究においても前提されるとすれば問題である。しかし『論考』の解釈者たちの多くは、以上のような理解（の少なくとも一部）を共有しているように思われる<sup>2</sup>。すなわち、『論考』がフレ

一ゲの言語哲学の強い影響下で書かれたものであるということ、そして基礎付け主義的認識論に基づく見解（「面識の原理」）を意味の分析に先行させるラッセルの哲学とはまったく異なる哲学を述べている書物である、という見方である。

このような『論考』解釈の問題点として、まずはそれが完全に間違ったラッセル理解を前提していることが指摘できる。しかしこの点に関してはもうすでに何度も論じているので、今回は省略する<sup>3</sup>。第二の問題点としては、ラッセルからの影響を見誤ったが故に、『論考』理解に不可解な点をいくつも残してしまうことを挙げることができる。本論文では、『論考』がラッセルからの影響下にあるとすることで、この第二の点の一部<sup>4</sup>が解消されることを示したい。

本論文での議論は、『論考』のごく一部に関する考察に過ぎない。しかし本論文の議論が正しいならば、それは先の分析哲学史観の中には納まらない、別の「分析」理解があったことを示す一助になるだろう。そればかりではない。ラッセルの論理的原子論と『論考』の哲学の真の相違を見て取ることは、たとえば「論理学の真理の必然性から、どこまで実在の必然的構造としての存在論的カテゴリーを読み取ることができるか」という形而上学的議論に寄与することになるだろう。あるいは、『論考』が『哲学探究』の成立に大きく関わっていることを踏まえれば、分析哲学史を大きく読み替える可能性を持つと言える<sup>5</sup>。

## 2. 『論考』における「分析」はフレーゲ的か

『論考』のどの点にフレーゲの影響を見るかに関しては、論者の中で違いがあるが、今回は「文脈原理」の受容に注目する。フレーゲは文脈原理に基づいて文を名と関数記号に分節化し、そしてそれに伴い、文によって表現される世界の側に関数記号が意味する不飽和な存在者が認められるとした。これを「フレーゲ的分析」と呼ぶことにする。本論文では、『論考』は「フレーゲ的分析」を受け入れているとする解釈を批判したい<sup>6</sup>。

不飽和な存在者としてどのようなものを考えるかに関しては違いがあるが、固有名と述語・関係語の区別がなされるのに応じて、固有名の意味する個物という飽和的な存在者と、述語が意味する性質や関係といった不飽和性を持った

関数的存在者の双方が『論考』の存在論に含まれるとする見方が一般的だと思われるので、これを批判の対象とする<sup>7</sup>。この立場は、『論考』が文脈原理のみならず、それに基づく存在論的カテゴリーの区別をもフレーゲから受け継いでいるとする見解であると言ってよい。しかし、関数記号が意味する不飽和な存在者を受け入れているとすることを示す根拠は、『論考』の中にはない。むしろ、それを否定する主張ととるべき見解が示されていると思われる。そう考える理由は、以下の三つである。

- ① 『論考』の存在論は「対象 *Gegenstand*」と「事態 *Sachverhalt*」のみを存在者として認めている。

『論考』において言語と世界の間の表象関係が設定されているのは、「要素文 *Elementarsatz*<sup>8</sup>」と事態の関係においてである。しかし要素文は名のみからなり、事態は対象のみからなるとされており、名と関数記号という言語上の区別、そして飽和的か不飽和かという存在論的区別は、要素文と事態のレベルでは認められていない。また比喩的な語り方であるとはいえ、事態において対象が「鎖の環のように互いに繋がりあっている」(2.03)としていることは、事態の構成が対象間の「飽和・不飽和」という非対称性に基づいていないことを示唆している。

『論考』における「名 *Name*」、「意味 *Bedeutung*」、「対象」の概念がフレーゲ由来であるとするのならば（私はこの点は否定しない）、『論考』の存在論は飽和的な対象と、それらが直接結合することによって構成される事態のみからなり、『論考』は不飽和な存在者を認めていないとすべきではないか。「対象」が不飽和でもあるとするのは、『論考』解釈に不可解な点を残すことになる。

- ② 『論考』においては、「関数 *Funktion*」はフレーゲ的な不飽和な存在者を表現する用語ではない。

『論考』において「関数」は、「文の意味を特徴づける部分」である「表現 *Ausdruck*」の一種である (3.31-3.313)。すなわち、複数の文に意味の共通性がある場合、その共通する側面を特徴づけるために、その部分を定項とし、共通していない部分を変項に置き換えることによって構成される「文変項」が「関数」である。たとえば「ソクラテスはプラトンを愛する」と「アリストテレスはプラトンを愛する」という二つの文は、「はプラトンを愛する」という共通する部分を持っている。そしてこの部分は、それぞれの文において、それらの意

義（真理条件）に寄与する共通する側面をとらえている。したがって、それらの文（および、同じ意味の共通性を持つ他の文）をまとめて特徴づけるために「 $x$ はプラトンを愛する」という関数表現を用いることができる。ただしそれらは単純な記号ではないため、名ではない。名を二つしか要素として持たない文から一つの名を変項に変えると、確かにその表現の定項部分の一つの名だが、形成された表現自体は単純な記号ではないので名ではない。このような文の部分となる要素を『論考』では「表現」と呼ぶ。

この「表現」としての関数に関して注目すべきは、それがフレーゲの「関数」や「概念」とは違って統語論的存在であること、そして文の構成要素ではない（＝名ではない）こと、この2点である。関数という表現は、文の意味に共通性があることを前提する。『論考』においては、名のレベルでは、ある一つの対象には一つの名が付けられるのだから、意味に共通性がある場合には、文を構成する記号にも共通性がある。表現は、共通する記号を持つ文を記述するために構成される新たな記号表現<sup>9</sup>であり、世界の中にある何らかの存在を記述する記号ではない。そして関数の変項に名を代入することによって出力される値は、その表現を含む文であり、文が意味する内容（フレーゲの「思想」やラッセルの「命題」）でもなければ、『論考』における事態や事実でもない。フレーゲにおいて「関数」は関数表現の意味 *Bedeutung* であり、意味論的存在者であったが、『論考』の「関数」は徹底して統語論的存在者である。つまり『論考』のシステムは、名と要素文のレベルで言語と世界の意味論的關係が成立しているという前提の下で、要素文を再記述する手段としての関数論を展開しており、関数に対する統語論的操作は要素文と関わるところで止まる。これが『論考』の見解であると思われる<sup>10</sup>。

③関数に意味があるとしても、それが論理的統語論の規則に寄与することはない。

仮に『論考』の関数に意味となる存在者を認めたとしても、それは論理的には何の機能も果たすことはない。というのは、関数は文を記述するためのものである。そして、どのような文がそれによって記述されるのかは、どのような文から関数が形成されたかによって決定されるのであり、したがって問題は統語論的操作において完結するからである。それどころか、「論理的統語論におい

ては、断じて記号の意味が役割を果たすようなことがあってはならない。論理的統語論は記号の意味を論じることなく立てられねばならず、そこではただ諸表現を記述することだけが前提にされうる」(3.33)と、記号の意味を締め出したうえで規則が形成されねばならないとすら言われている。たとえば関数記号の変項がどのような値をとりうるかを論じるときに、「値 [がとりうる範囲]の確定とは、諸文に対する一つの記述 [を与えること]である。それゆえ、値を確定することはただシンボルにのみ関わり、その意味には関わない。値の確定がシンボルの記述にすぎず、それが何を描出しているかには触れないということ、値の確定にとって本質的なのはこのことだけである」(3.317)とされている<sup>11</sup>。

さらに、ここでウィトゲンシュタインが主張していることを字義通りに受け取るならば、『論考』においては、関数記号は事実ではなく文を記述する、という見解を読み取ることができる。一つの文から、複数の仕方に関数記号を切り出すことができる。「ソクラテスはプラトンを愛する」という文は、「x はプラトンを愛する」に「ソクラテス」が代入された文と見なせるだけでなく、「ソクラテスは x を愛する」に「プラトン」が代入された文と見なすこともできる。もちろん「ソクラテスはプラトンを愛する」は、両方の関数の値となるが、しかしこれらの関数記号はそれぞれ異なる文の集合を記述する。

私には、『論考』はこのように統語論的レベルを二重化する見方を示していると思われる。ここで、関数の変項に名を代入して新しい文を形成する可能性は、もともとの文から特定の名が変項に置き換えられたという統語論的操作によってのみその妥当性が決定されているのであり、関数の意味する不飽和な存在者が、名の意味する飽和的対象を受け入れることによって裏づけられるわけではない。このような見解は不可解に思えるが、第5節で確認するように、『論考』の量化文の分析は確かにそうした見解を含んでいる。しかし、フレーグ的分析を『論考』に帰す解釈はこの不可解さを説明できない。

なぜウィトゲンシュタインは統語論を二重化し、構文論的規則を各記号の意味する対象の制約から解放しなければならなかったのか。そのことを明らかにしているのが、『論考』の5.55–5.561である。5.55では「いま我々は、要素文のすべての可能な形式に関する問いに、ア・プリオリな仕方では答えねばならない」、つまり我々が要素文の論理形式がとりうる可能な形式のすべてを思考しう

ることを、経験に訴えることなく保証しなければならないとされている。5.553から 5.5541 ではより具体的に、主語-述語形式、二項関係形式、三項関係形式といった対象の持ちうる論理形式が、その形式を持つ関係の存在の認識によって保証されるとするラッセル的な見解が批判されている。ウィトゲンシュタインがそう考える理由は、「論理によって決定される問いは、論理のみによってすべて決定されねばならない」(5.551) からである。

仮に、性質や関係がある数の空所をもつ関数的存在者であるとし、それが要素文の論理形式を裏づけるとする。この場合、その項数の関数的存在者がかもし一切存在しなければ、その項数の関数記号を用いた推論は不可能になるだろう。また、その推論の妥当性が、その項数の関数的存在者の形式的特徴を認識するという経験に基づいて説明されることになる。これはラッセルが実際に検討した論理の妥当性の説明方法であり、ウィトゲンシュタインが『論考』において批判しようとした見解に他ならない。

名も、それが意味する対象も、もちろん論理形式を持つ。しかしそれは、可能な推論の範囲を確定する機能を果たしてはならない。推論に用いられるのは関数記号であるが、妥当な論理的推論の範囲は、世界の偶然的な特徴である対象の論理形式によって制約されてはならず、名と要素文から形成可能な関数記号の形成規則によってのみ裏づけられなければならないのである。

しかし以上のような解釈は、次のように批判されるかもしれない。論理的統語論が世界ではなく文を記述する記号システムの規則であるとするのは、『論考』解釈として決定的に誤っている。なぜなら、『論考』では言語は世界と論理形式を共有しており、そのおかげで言語は世界の在り方を描写しているとされている(2.17-2.18)。したがって、『論考』は世界について語る言語に関する統語論を与えて分析しようとしているのであり、二重の統語論のうち、文を記述するレベルに属する関数を論理的統語論が統括すると考えるのは誤りである。またこの論理形式は名の意味する対象の論理形式であり、『論考』では対象に論理的多様性が認められていると思われる。実際、『論考』の「対象」は「個物 particular」だけでなく「性質 property」や「関係 relation」も含むと思われる<sup>12</sup>。性質や関係は不飽和な関数的存在者ではないだろうか。そうでないとすれば、個物との間の論理形式の違いがどういう違いなのか分からなくなる。本論文の

立場が、逆にこうした不可解さを解消できないのであれば、『論考』に不飽和な存在者を認めるべきである。

このような批判，あるいは疑問に対しては，ウィトゲンシュタインが『論考』に結実する思考をしていた状況，すなわちラッセルとの関係を引き合いに出すことで答えることができる。ウィトゲンシュタインがラッセルから何を受け取っていたか，ラッセルの見解のどのような問題を克服しようとしていたのか，それを理解するならば，本節でしめした見解はむしろ当然とすべきものと見えてくるのである。

### 3. 『論考』の背景としてのラッセル哲学

『論考』の見解の形成過程にはもちろん多くの要因がかかわっているが，そのうちの最大のものがラッセルとのやり取りであることは間違いない。では，同時期のラッセルの哲学とはいかなるものであり，どの側面が『論考』に影響を与えているのか。

ラッセルの哲学的出発点は，1903年の『数学の諸原理』(以下、『諸原理』と略)であるが，そこでは次のような意味論，存在論が提示されている<sup>13</sup>。すべての語は「項 term」という単一の存在論的カテゴリーに属する何らかの対象を指示し，それを意味として持つ。どの項も他の項から独立に存在する自立的存在であり，いわば論理的実体である。『諸原理』では，命題の論理的主語とすることができ，語りうるものすべてが項であるとされ，したがっていかなるものについてもそれが項であることを否定する命題は偽となるとされる(Russell(1903), sec. 47.)。ただし項の間には論理的・存在論的ふるまいの違いがあり，それに応じて物や概念，関係などに区別される。そしてこの区別を反映して，それらを表す語もまた固有名および一般名，形容詞，動詞や前置詞に区別される(*ibid*, sec. 48.)。単純な「項」の概念は、『プリンキピア・マテマティカ』(以下、『プリンキピア』と略す)では「個体 individual」，「論理的原子 logical atoms」(「論理的原子論の哲学」と呼ばれることになる)。

複数の語から構成される文もまた一種の名であり，その要素である語の指示対象からなる複合的な項である「命題 proposition」を意味する。ここで「命題」

が文のタイプでもトークンでもなく、文の意味である存在者、複合的な項であることに注意しなければならない。命題には真という性質を持つものと偽という性質を持つものがあるが、真である命題が「事実 fact」である。

命題の間には様々な法則的關係が成立しており、諸科学はそうした關係の特定の種類の成立・不成立を記述する。一方、すべての命題の間に成立する普遍的な關係(真理関数としての「ならば」が意味する關係)、そしてそれによって成立する世界の普遍的構造を記述する学問こそが論理学であるとされる。論理学は実在を記述するのであり、それが普遍的な構造の記述であるからこそつねに真であるのである。

しかしこのような素朴な原子論的存在論には、いくつもの困難がある。ここでは、本論文での『論考』解釈に関わる二つの問題に絞って紹介したい<sup>14</sup>。

一つは、命題の統一性の問題である。語が結びついて文が出来上がるように、単純な項が結びついて複合的な命題や事実が出来上がる。しかし、文は語のリストではないし、単なる項の寄せ集めと命題は違うはずである。違いは、文および命題においては、構成要素が結びつくことによって統一性がもたらされ、それらが一つの存在になっているという点にある。では、いったい何がこの違いを生み出し、命題に統一性をもたらしているのか。

『諸原理』においてラッセルは、有意味な文は必ず動詞を一つ含まなければならないことに注目し、動詞が意味する關係こそが命題に統一性をもたらすとした。しかしこの見解には問題がある。まず、關係は必ずしも命題中でその他の項を關係づける働きを持つとは限らない。たとえば「親子は夫婦よりも強い絆である」という文が意味する命題においては、親子であるという關係について主張がなされており、その關係は命題を統一する役割を果たしていない。この命題でその役割を果たしているのは「…は…よりも強い絆である」という部分が表現している關係である。つまり關係は、統一する働きを持つときと持たないときがある。ラッセルはこれらを「關係づける關係」と「項としての關係」と呼んで区別するのだが、その違いが一体いかにして生じるのかを説明できなかった(*ibid*, sec. 54.)。

もう一つは「表示 denoting」にかかわる問題である。『諸原理』の実在論的意味論にも例外が認められる。それは、一般名詞に“all”, “every”, “any”, “some”,



“a”, “the”という6種類の語が付されることで形成される表示句 denoting phrase が文中に含まれる場合である(*ibid*, sec. 56.). たとえば「すべての人間は死すべきものである All men are mortal」という文が意味する命題には、「すべての人間 all men」という表示句が意味する概念が含まれる。しかしこの文が主張しようとしているのは、この概念がいずれ必ず死ぬということではなく、一人一人からなる人間のすべてについて、彼らが例外なくいずれ死ぬということである。この事態を説明するために、ラッセルは6種類の表示句が文中に含まれる場合、それらは一種の特別な概念(表示概念 denoting concept)を意味し、その文は表示概念を含む命題を意味するとする。そして、この表示概念がそれぞれに異なる仕方での他の項を「表示する denote」ことにより、命題の要素になっていない項について語る事ができる、と主張する。この表示という関係は、表示概念という抽象的存在者と様々な項の間に成立する関係であり、人間の心的能力とは独立である。ラッセルは、人間が語で項を意味するという関係を「心理的意味」、それに対して表示を「論理的意味」と呼び、表示こそ論理学が扱うべき意味関係であるとした(*ibid*, sec. 51 および 56.).

しかしラッセルが表示概念の理論を必要としたのは、表示句に適切な意味論を与えるためではない。先に述べたように、ラッセルは論理学を世界の普遍的な構造を記述する学問であるとしたが、その時、それほど広大な領域にわたる抽象的構造について成り立つ普遍的真理や、無限の数の要素を持つ集合を、なぜ有限の能力しか持たない人間が知り、語る事ができるのかが問題になる。表示の理論はこの問題に対する解決として構想されているのである。たとえばクラスは、クラスを表示する表示句(以下、「クラス名」と呼ぶ)によって表現される。このとき、クラス名が意味する表示概念が、そのクラスの各構成要素との間に表示関係を持つおかげで、表示概念という単一の存在者を知るだけですべての要素について語る事ができる。このケースのもっとも極端なケースが、論理学の命題である。論理学はありとあらゆる項について語るが、それは「変項 variable」を使用することによって可能になる。変項記号の意味は「任意の項 any term」という表示概念と同じである(*ibid*, sec. 88.). したがって、この表示概念はすべての項に対して表示関係を持ち、それによってありとあらゆる項について語る事が可能になる。すべての項の間に成立する普遍的な関係構造につ

いて語るには、変項のみからなる命題を用いることになるため、論理学上の文はそれらを意味する変項記号のみからなることになる。

このように、表示概念の理論はラッセルの論理的存在論にとって中心的な役割を果たすものであったが、ここにもまた致命的な問題があった。いわゆる「グレイの悲歌論法」が示している問題である(Russell(1905), pp. 421–3)。表示の理論によれば、表示概念が命題に含まれるとき、その命題は表示概念についてではなく、それが表示する対象についての主張を行う。では、表示概念について語りたい場合はどうすればよいのか。表示概念について語ろうとして、素朴にそれを意味する表示句を含む文を用いると、それが意味する命題は当の表示概念を含むのだから、表示概念そのものについてではなく表示の対象について主張することにしかない。難解なことで知られる「グレイの悲歌論法」が示しているのは、これ以外の回りくどいやり方をとったとしても表示概念について語ることはできない、ということである。

変項も命題関数も論理学の基本的な存在者であるため、それらについて語れないことはラッセルにとって致命的と言ってよい困難であった。

#### 4. 統語論的分析としての「不完全記号の学説」による解決と限界

ラッセルは、これらの問題を解決するために「不完全記号の学説」を考案した<sup>15</sup>。突破口となったのは、1905年の論文「表示について」で示された、記述理論による記述句の分析である。『諸原理』の表示の理論とは違い、記述理論では表示句（これ以降、記述理論において標準的な呼称である「記述句」と呼び変えることにする）に表示概念を意味として割り当てない。たとえば「現在の日本の首相は短気である」という文中の「現在の日本の首相」という表現は、文法的には複合的であるが、特定の人物を表現する一種の名前（単称名）であるように見える。しかし「記述理論」によれば、この文は次のように書き換えられねばならない。

「 $\exists x(x \text{は日本人である} \wedge x \text{は現在の首相である} \wedge x \text{は短気である} \wedge \forall y(y \text{は日本人である} \wedge y \text{は現在の首相である}) \rightarrow x=y)$ 」

この分析の結果、「現在の日本の首相」という記述句は文法的単位としては解体されてしまい、實在論的意味論に従って何らかの存在者を意味として割り当てる必要が無くなっている。そして分析結果である文中では、表示概念と表示の対象という二重の意味は必要ではなく、語が何らかの存在者を意味するという単層の意味関係で文の有意味性の説明が完了する。つまり、意味のレベルで生じた問題を、統語論レベルでの文の書き換え・分析によって解消するのである。

この分析手法は、「現在の日本の首相は短気である」という文全体を、分析結果とされる量化文を不正確な仕方では表記したものとしますが、しかし元の文全体を有意味であると認めてもいる。文全体が有意味なので、あたかもその要素であるかに見える記述句もまたそれ自体で有意味であるかに見えるが、そうではない、ということがポイントである。そこで、元の文の全体の有意味性を出発点として、まずは統語論的に書き換え、意味を割り当てるべき本来の統語論の対象を析出しなければならないとするのである。この書き換え作業とその後の意味の割り当てこそ、「不完全記号の学説」において「分析」と呼ばれる作業である。このような「分析」のとらえ方を「ラッセル的分析」と呼ぶことにする。

ラッセルは『プリンキピア』では、このように分析されるべき記号が有意味に使用されているという事態を、記述句は「一定の使用の文脈の中でのみ意味を持つ」という言い方で表現している<sup>16</sup>。本来の名は使用の文脈とは独立に意味論的原則が適用され、その指示対象が意味として割り当てられるが、記述句はそうではない、という意味である。このような、使用の文脈とは独立に意味が与えられず、その使用の文脈全体を正しい表記法に従って書き直さなければならない記号、それが「不完全記号」である。

「記述理論」を含む「不完全記号」の学説の中心になるのは、命題に対して正しい表記法を与える「判断の多項関係理論」である。『諸原理』では、命題は文を構成する語の意味する項からなる複合的な項だとされた。これに対して「判断の多項関係理論」では、文が一定の人物による判断の表明という脈略で使用されることに注目し、その使用の脈略全体に対して正しい表記を与えるべきだとされる。たとえばラッセルが「ソクラテスはプラトンを愛する」と判断する

とき、その判断に用いられた文がそれ自体で有意味性の単位になるのではない。有意味なのは、ラッセルがその文を用いて判断しているという使用の脈略全体であり、それを正しく表記すると

J(ラッセル, プラトン, ソクラテス, 愛する)

となる（ここで「J」は「判断する」という心的作用を意味する表現である）。このような表記を与えるときには、もはや「プラトンはソクラテスを愛する」という文の意味となる複合的な存在者を認める必要はなくなっている。文を統語論的単位として扱い、それに意味を割り当てるのではなく、判断（あるいはその表明である言明）という使用の脈略全体を正しく表記することにより、文の意味とされた命題は消去されるのである。

命題関数、たとえば「x はプラトンを愛する」は、単称文の主張で表現される判断の内容となる対象のいずれかを変項で置き換える、という操作によって構成される新しい判断の内容である。命題関数を内容とする判断に、さらに存在量化や全称量化という操作を加えれば、たとえば「現在の日本の首相は短気である」や「すべての人はプラトンを愛する」のような文で表現される判断を形成できる。後者の判断を我々は、日常言語では「すべての」で始まる名詞句で表現する。それにより、あたかもクラスという抽象の対象について語っているかに見えるのだが、実はそこで表現されているのは判断であり、判断主体とクラスの要素に共有されている諸特徴（人間であること、プラトンを愛すること）が言及されているに過ぎない。

以上の判断形成の過程を逆にたどれば、クラス名や記述句は、量化理論と記述理論による分析を通じて、命題関数の記号を含む量化文に書き直され、さらにその量化文は、それをういて表現される判断に書き直される。そしてこの量化文によって内容が表現される判断は、単称文を内容とする基底的な判断から、対象を変項で置き換える操作と量化という操作を反復適用して形成されたものであることが明らかになる。こうしてクラスや記述句もまた、クラスの理論と記述理論、そして多項関係理論によって、判断という使用の文脈に解消されることになる。

このように、「不完全記号の学説」によって「命題」と「命題関数」（さらにはクラス）を構成して見せることで、ラッセルは単純な名の意味である項（あるいは「個体」）のみを基底的な存在者として認めるだけで論理学を展開することができる、としようとした。しかし以上の「不完全記号の学説」では、統一性の問題も表示の問題も完全には解消できていない。

まず、命題という存在者は判断という文脈で解消されたが、それは判断を本来の真理値の担い手とする、ということでもある。では、その判断の真偽は一体いかにして決まるのか。多項関係理論以降のラッセルは、真理の対応説を支持する。すなわち、判断は客観的な事実と対応するときに真であり、そうした事実を欠いているときに偽であるとされる。事実は、判断内容を構成するのと同じ項から形成されているが、しかしそれらが統一されあくまで一つの事実として成立している。では、本来は各々が独立で自立した項が事実を形成するとき、いったい何がそれに統一性をもたらしているのか。この点を、ラッセルは依然として説明することができない。統一性の問題は命題から事実に移されただけで一向に解消されていないのである。

次に、記述理論による量化文の分析は、変項記号と命題関数を表す記号を原始的な表記法として使用していた。命題関数を多項関係理論によって消去するとしても、変項は残る。したがって、ラッセルの立場からすれば、少なくとも変項記号には意味が割り当てられねばならない。しかし、先に見たように、変項記号の意味は表示概念であった。ということは、記述理論はすべての表示概念を消去して見せたわけではなく、変項という種類の表示概念に切り詰めたに過ぎない。しかも、ウィトゲンシュタインからの批判に応じて多項関係理論を改訂していくうちに、ラッセルは複合的な変項ともいえる論理形式 *logical form* を判断内容に含めることになった<sup>17</sup>。表示概念について語るができないという問題が深刻であるのは、変項を表示概念とすることが「論理学とは実在の普遍的構造を描出する学問である」という論理学観を支えるために必要だからであった。まさにこの急所ともいえる地点で、表示の問題は解決されていないどころか、悪化しているのである。

これまでラッセル哲学の特徴とそれが抱えている困難、解決策としての「不完全記号の学説」とその限界を見てきたが、これらは第2節で指摘した『論考』

の見解の不可解さを説明する手掛かりとなる。

まず、ラッセルの存在論は「項」と呼ばれる単純で自立的な（すなわち不飽和性を持たない）論理の実体と、それが結合して出来上がる事実からなる。単純な項はすべて名によって指示され、また個体変項の値となるのであり、名の間にも項の間にも論理的タイプの違いはない。この単純な実体である「項」というカテゴリーには、個物 particular のみならず、性質や関係などの普遍 universal も含まれる。『プリンキピア』では、この個体変項の値となる存在者を「項」ではなく「個体 individual」と呼んでいる。つまりラッセルにおいては性質も関係も個体であり、個体変項の値となる。そしてこれは、『論考』において「対象」という単一の飽和的な存在者の中に、性質や関係も含まれていることに対応している。確かに『論考』は論理形式の多様性を認め、個物だけでなく性質や関係も存在者として受け入れているが、それはラッセルの「個体」と同様にあくまで飽和的な「対象」として受け入れているのである。

一方でラッセルの「命題関数」は個体ではない。個体についての命題関数は個体についての命題の集合を前提し、それらを表示するために命題の一部を変項に置き換えることによって形成されるものである。命題関数は命題を表示する論理的記号、表示概念であって、命題の構成要素ではない。命題関数は命題から形成されるため、命題関数は個体とは違い個体変項の値とならない。したがって、ラッセル哲学においては、性質・関係という普遍者と命題関数は異なる論理的对象である。性質・関係と命題関数の違いは、『論考』において、前者が名によって意味される対象であるのに対し、後者は「表現」そのものであって、文や事態の単純な構成要素ではないとされている点に反映されている。関数記号を使用し、かつ性質や関係が存在論に含まれているからと言って、『論考』が不飽和な関数的存在者を受け入れていると解釈しなければならない理由はない。

このように、『論考』が個物だけでなく性質や関係を「対象」と認めつつ、それを不飽和な存在とせず、また関数記号の意味として論理的に機能させないことは、ラッセル哲学における個体と命題関数の区別を引き継いだものとみなすことができる。

また『論考』の関数論は、名と関数からなる文で別の文を記述すること、す

なわち統語論のレベルを二重化するという不可解な見解を含んでいたが、これもラッセルからの影響として理解することができる。命題、変項と命題関数を代表とする表示概念、クラスなどの存在者が引き起こす問題を解決するためにラッセルが案出した理論が「不完全記号の学説」であった。それは、命題・表示概念・クラスを指示するかに見える記号そのものを、その使用の脈略全体を正しい論理的記号法で明示的に書き表すことによって解体し、それらが意味するとされた対象を消去するという方法であった。このラッセル的分析は、意味論においては一貫して「名は対象を指示する」という単純な実在論的立場をとりつつ、「分析」を統語論のレベルで行うものであり、記号の多様性に応じて意味論的カテゴリーを区別するフレーゲ的分析と鋭い対照をなす。しかし「不完全記号の学説」によっては解決できなかった問題がある。一つは命題・事実の統一性の問題と、変項や命題関数をいかにして消去するかが問題として残った。仮に命題関数は多項関係理論で解消されたとしても、変項および複合的な変項である「論理形式」は残ってしまう。この「不完全記号の学説」が持つ限界が、『論考』の関数論が統語論的レベルを二重化していることを説明するのである。

ラッセルの理論では、文が意味する実在の領域の内部で、「事実を命題が記述し、その命題を命題関数が表示する」という二重の意味関係が認められている。そしてそれは、文や関数記号によって意味される存在者の間に成立する意味関係であって、文や関数記号と実在との間の関係ではない。では、この存在者間に成立する意味関係にまつわる問題を、「不完全記号の学説」によって解決するにはどうすればよいか。具体的な手続きはさておき、意味する役割を果たす存在者を統語論的存在にしなければならない。なぜなら不完全記号の学説は、統語論のレベルで分析を行うことで問題を解消する手続きだからである。すなわち、ラッセルの理論において事実を表現する複合的存在者としての「命題」を、統語論的分析の対象とするために文に移すと、命題の集合を論理的に意味する命題関数は、文の集合を意味する「表現」のレベルに位置づけられることになる。そうして、文を記述する表現としての関数を消去する手続きを統語論的規則として与えるならば、「不完全記号の学説」の一貫した適用により、つまりラッセル的分析によって問題を解決することができる。

今のところ、以上は『論考』の不可解な点を説明するために提出された仮説

にすぎない。次節では『論考』の見解が不完全記号の学説の基本方針と一致することを確認し、以上の仮説に一定程度の説得力を与えるを試みる。

## 5. 「不完全記号の学説」の徹底化としての『論考』

論理学の哲学的考察として『論考』が目指しているのは、論理的对象やそれが形成する構造を持ち出すことなく、論理的真理を特徴づけること、あるいは論理的推論の必然性の由来を明らかにすることだと言ってよい。『論考』では、そのためにまず命題論理学において、論理結合子を用いて書かれる複合的な文を、真理表という論理結合子を用いない表記法で表し、論理結合子の意味する対象を持ち出すことなく論理的真理と必然性を説明する。

文の意義とはその真理条件であるため、複合文の意義を明らかにすることは、要素文によってその真偽がいかんにして決まるかを示すことである。真理表は「PかつQ」などの複合文が、要素文の真偽のどのような組み合わせによって真または偽になるかを明らかにする。各要素文の真偽の組み合わせ可能性は、複合文が使用される際の世界のあり方の可能性であり、すなわち複合文の使用の脈略であると言える。『論考』は、この使用の脈略とそこで複合文の真理値を明示的に書き表した記号、すなわち真理表そのものを複合文の正しい表記法であるとする(4.442)。このように書き換えることで、「かつ」などの論理結合子が何らかの対象を指示しているとするのではなく、複合文の意義が確定することを明らかにすることができる。このような『論考』の命題論理学上の複合文の分析は、「使用の脈略全体に正しい表記法を与えることにより、不完全記号を統語論上で消去し、意味となる対象を不要にする」という「不完全記号の学説」の実行形態になっていると見なすことができる。

真理表という正しい表記法を用いて、「かつ」、「または」、「もし…ならば…である」、そして「…ではない」などの論理結合子を用いて表される命題論理学の論理的真理を書き直すと、それが要素文のいかなる真偽の組み合わせにおいても真になることが、表記そのものから明らかになる。これは真理表の書き方、すなわち文の正しい書き方を指定する統語論的規則からの帰結であり、論理的存在者からなる実在の普遍的構造などによって裏づけられる必要はない。この



ようにラッセル的分析手法によって、命題論理学の論理的真理の必然性が統語論的規則に従うことの結果として理解できるようになる。

以上は命題論理学上の真理の処理方法であるが、『論考』では、述語論理学上の文、すなわち量化文は、命題論理学上の文の縮約した表記法に過ぎないとされる。すなわち、量化文は、要素文を否定し、それを連言で結合するという操作（これを「操作 N」と呼ぶことにする）によって形成されるのであり、命題論理学上の文の新しい表記法に過ぎない（5.5-5.52）。操作 N の適用対象となる要素文の範囲は三つの方法で定められる。要素文の単純な枚挙、文を形成する形式的規則の提示、そして「関数  $fx$  の提示」<sup>18</sup> すなわち、「 $x$  に値を代入して得られる関数の値のすべて」として操作 N の対象となる範囲を確定すること、この三つである。

先に見たように、関数とは意味に共通性がある文を取りまとめるための手段であった。そして『論考』の前提では、意味上の共通性は表記上の共通性に反映しているはずであり、関数は文の統語論的特徴に即して形成される、それ自身統語論上の存在である「表現」であった。またそれゆえ、逆に変項に名を代入して関数の値として文を得るという操作も、統語論上で完結する操作であった。だとすると、『論考』の量化の理論は、名のみからなる要素文を「名と関数」というそれとは異なる表記法によって記述することにより、操作 N の範囲を定めること、そしてそのように範囲を定めた結果、まとめて記述された要素文の集合の真偽からその集合の要素である要素文の真偽が帰結することを明らかにする理論であると言える。そしてここでの真偽の帰結関係の必然性は、命題論理学の必然性に還元される。命題論理学の真理の必然性は統語論的規則の適用の帰結であったので、結局のところ述語論理学の真理の必然性もまた、統語論的規則の適用の帰結であることになる。

以上のような『論考』の量化の理論、特に関数を用いた理論は、変項や関数、そして量子子をラッセル的分析によって消去することを提唱しているものとして理解できる。量化文をそのままの表現形態で有意味とみなすと、量子子、変項記号の意味が問題となる。しかし統語論を二重化し、関数を操作 N という統語論的操作の中で用いられる、文を記述する役割を果たす記号であることで、実在の中にそれらの記号が指示する対象を認める必要がなくなる。そし

て量化文の真偽は、操作 N の適用対象となる要素文の真偽によってのみ確定するので、量化文の意義を説明するために、統語論的操作を定める規則と要素文が表現する事態以外の何物も必要ではない。つまり『論考』の量化の理論は、量化文の使用の脈略として要素文とそれに対する操作 N を取り上げ、それを明示化する表記法を提示することで、論理の対象を要請することなく述語論理学の必然性を説明するものとして理解できる。すなわち「不完全記号の学説」の徹底的な適用事例として理解することができる。

以上の量化の理論では、名と関数の結合したものは要素文を記述する文である。その文を名と関数に分節化することは、要素文において名が結合している仕方と必ずしも一致しないが、名の意味である対象以外の何かが存在することを必要とはしない。事態の構成要素となる複数の対象からなるまとまりを表現しているとみなすだけで、関数が切り出した要素文の間の部分的な意味の共通性を説明するには十分である。関数や要素文から名を取り除いた断片が、要素文という文脈から離れてそれ自体として意味を持つ記号として扱われることはないため、それらの意味と想定される不飽和な存在が『論考』の存在論に登場する機会はない。

不飽和性を何らかの仕方で存在論の中に取り込まなければ、個物と性質・関係の間の論理形式の区別が付けられないのではないと言われるかもしれない。しかし、そうではない。『論考』においては、対象の間の論理形式の違いは、他の対象との結合の可能性であるとされている(2.0141, 2.032–2.033)。そして対象は事態の可能な要素となることをその本質とする。つまり、対象はつねに事態の要素としてのみ考えられ、その論理形式の特徴づけも、現に成立している事態と可能な事態の組み合わせにおいてのみ明らかにされる。個物として特徴づけられる対象は、一つの性質という対象や、一つの二項関係および一つの個物という対象と結合する可能性を持つことが、現実的・可能的事態において明らかにされるが、論理形式の解明はもうそこで済んでいる。ここからさらに一步踏み出し、「性質や関係が不飽和性を持つがゆえに、この記号配列は有意義な文であり、この記号の配列は無意味である」とする必要はないし、またそれは要素文と事態という文脈の外部で名と対象の意味関係が成立しようという見方を前提し、また有意義な要素文の可能な範囲を経験的な世界の在り方に制約させ

ている点で、『論考』が支持するはずのない見解である<sup>19</sup>。

このように『論考』の存在論を理解することは、ラッセルが解決し残した問題、すなわち命題（または事実）の統一性の問題も解消する。性質・関係のみならず、個物も含むすべての対象は事態の要素となる以外には存在しえない。したがって、そもそも自立的な実体が集まっていかんして複合的な存在である事実・事態が形成されるかという問題は、『論考』では問題になりえない。この問題に対して「性質・関係が不飽和だから」と答えようとするのは、再び『論考』の基本的見解に反しており、ありえない解釈として退けられねばならない。

対象が事態の構成要素となることを本質とするという見解は、もちろんウィトゲンシュタインがフレーゲの文脈原理を受容していることの表れであるとみなすことができる。しかしこのことは、『論考』がフレーゲ的分析まで引き受けているということの意味しない。『論考』における「分析」は、あくまでラッセル的な、統語論のレベルでの文の書き換えとして解釈されることができ、またそう解釈するべきなのである。

本論文は、日本学術振興会科学研究費助成事業の助成金（基盤研究 C 課題番号 17K02190 研究課題名「ラッセルの中性的一元論の現代性」）に基づく研究の一部である。

## 註

- <sup>1</sup> Dummett (1975), pp. 441–3 で提示されている分析哲学観に基づく。
- <sup>2</sup> 代表的な文献として、Anscombe (1959), Carruthers(1990), Diamond(1988, 2010), Geach(1976), Hintikka and Hintikka(1986), Ishiguro(2011), 野矢(2002)を挙げておく。また、『論考』とフレーゲを結びつけているわけではないが、誤ったラッセル観をもとに、『論考』とラッセルの論理的原子論は全く異なる立場だという印象を流布するのに力があつた著作として、Pears(1987)がある。
- <sup>3</sup> 高村(2013)を参照せよ。
- <sup>4</sup> 『論考』の大きな謎として、「対象」とは何かが具体的に論じられていないことが挙げられる。今回はこの点を詳しく論じることができないが、ラッセルの「不完全記号の学説」が「命題の真の論理形式を誤解し、本当の名前を知らないまま、不完全記号を本来の記号であるかのように使用しうる」としていることからの影響とすることで理解可能になると考えている。

5. たとえば『探究』の88節までで、ウィトゲンシュタインは語を一種の名とし意味を指示対象とみなす立場を執拗に批判しているが、これは明らかに「本当の名があるはずだ」というオブセッションに突き動かされて『論考』を書いた自身への批判である。そして彼がそのようにして『論考』を書くことができたのは、先の註で上げた「不完全記号の学説」のアイデアをウィトゲンシュタインが肯定的に受け取っていたからだと思われる。しかしこの点についても今回は立ち入って論じることはできない。
6. 対象と関数の区別以外にも、意義と意味の区別に関して『論考』は強い影響を受けているとされることが多い。たとえば Carruthers(1990)や Diamond(2010)がこの点を強調している。この点に関する影響を重く見すぎることに対する批判として、Kienzler(2011)を参照せよ。また、文脈原理を受け入れることは、必ずしも関数記号の意味として不飽和な対象を認めることを意味しない。関数記号の意味は対象ではないと解釈する可能性があるからである。このような解釈を採るものとしては、Carruthers(1990)を参照せよ。
7. 代表的な文献として Hacker(1972), p. 33, Hintikka and Hintikka(1986), pp. 39–40 を参照せよ（ただしヒンティッカ夫妻の見解は、註19で触れるような微妙さを持っている）。これに対して、Anscombe(1956)は『論考』における名はすべて飽和的な対象を意味として持つとし、一見不飽和な存在者を一貫して拒否するかに見えるが、空所のみからなる「論理形式」としてフレーゲ的「概念」が実在の側に残るとしている (p. 108–9)。一方、野矢とプロープスは、固有名の意味する対象もまた不飽和性を持つと解釈する。野矢(2002), 68–9, 91–2, 333頁, Proops(2011), pp. 217–8 を参照。今回直接批判の対象とするのはハッカーやヒンティッカ夫妻の見解であるが、それ以外の立場に対しても今回の議論は同様に成り立つと思われる。
8. 『論考』における Satz は「命題」と訳されることが多いが、ラッセルにおける「命題 proposition」との区別を明確にするために「文」と訳することにしている。
9. 「表現は、その表現を含むすべての文の形式を前提する。それゆえその表現は、それを含む文集集合を特徴づける共通のメルクマールとなる。」 (3.311)
10. 関数という記号が「概念」を意味するという見解を示唆する文言が『論考』に「一か所ある(4.126)。しかし、それが不飽和な存在者であることまで主張されているわけではない。むしろこの一か所しかないということが、不飽和な存在に関してフレーゲから影響を受けているとすることの説得力のなさを示していると思われる。
11. 誤った代入を禁じる場合も同様に意味の次元の締め出しが主張される。すなわち、ラッセルのタイプ理論に対して、「記号の規則を立てるのに記号の意味を論じなければならなかった点」(3.331)が誤りだとされる。なお、「[...]」は引用者による補足である。
12. Hintikka and Hintikka(1987), pp. 30–9, 野矢(2002), 63–8頁を参照。
13. 高村(2013), 第1章を参照
14. ここで言及されない困難の最大のものは、言うまでもなく「ラッセルのパラドクス」である。項の形而上学とパラドクスとの関係については高村(2013), 41–4頁を参照せよ。
15. 以下、本節の内容については高村(2013), 第2章を参照せよ。
16. Whitehead and Russell(1910–1913), pp. 66, 67, 71–2 を参照せよ。
17. Russell(1984), Part II, および高村(2013), 65–9頁を参照せよ。
18. 5.501と順番を変えている。関数の提示は二番目に挙げられる。
19. ヒンティッカ夫妻の見解はこの点で正しい(Hintikka and Hintikka, p. 42)。しかし彼女たちは同じ個所で、『論考』の「対象」は、性質や関係だけでなく個物も含めフレーゲ

の存在論的カテゴリーでは「関数」に相当するとも主張している。

### 参考文献

- Anscombe, E. *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus*. London: Hutchinson, 1959.
- Carruthers, P. *The Metaphysics of the Tractatus*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Diamond, C. 'Throwing Away the Ladder: How to Read the Tractatus', *Philosophy*, 63 (1988), pp. 5–27, reprinted in her *The Realistic Spirit*. Cambridge: The MIT Press, 1991, pp. 179–204
- “Inheriting from Frege: the work of reception, as Wittgenstein did it”, in *The Cambridge Companion to Frege*. Cambridge: Cambridge University Press, 2010, 550–601.
- Dummett, M. 'Can Analytical Philosophy be Systematic, and Ought to Be?' in his *Truth and Other Enigmas*. Cambridge: Harvard University Press, 1978, pp. 437–458.
- Geach, P.T. "Saying and Showing in Frege and Wittgenstein," in *Essays on Wittgenstein in Honour of G.H. von Wright*, ed. Jaakko Hintikka, *Acta Philosophica Fennica* 28 (Amsterdam: North-Holland, 1976), pp. 54–70.
- Hacker, P.M.S. *Insight and Illusion*. Oxford: Clarendon, 1972; revised 2nd ed., 1986.
- Hintikka, M.B. and Hintikka, J. *Investigating Wittgenstein*. Oxford: Blackwell, 1986.
- Ishiguro, H. "The So-Called Picture Theory: Language and the World in Tractatus Logico-Philosophicus", in *Wittgenstein: A Critical Reader*, ed. Hans-Johann Glock, Oxford: Blackwell, 2001, pp. 26–46.
- Kienzler, W. "Wittgenstein and Frege", in *Kuusela and McGinn(2011)*, pp. 79–104.
- Kuusela, O. and McGinn, M. *The Oxford Handbook of Wittgenstein*. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- 野矢茂樹 『『論理哲学論考』を読む』哲学書房, 2002年. ちくま学芸文庫, 2006年. 参照指示は文庫版による.

- Pears, D. *The False Prison: A Study of the Development of Wittgenstein's Philosophy*, Volume 1, Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Proops, I. 'Logical Atomism in Russell and Wittgenstein', in Kuusela and McGinn, (2011), pp. 214–239.
- Russell, B. *The Principles of Mathematics*. Cambridge: Cambridge University Press, 1903. 2nd ed., 1937.
- “On Denoting”. *Mind*, 14 (1905), pp. 479-93. Reprinted in *The Collected Papers of Bertrand Russell*. Vol. 4 *Foundations of Logic: 1903–05*, Urquhart, A.(ed.) London: Routledge, 1994., pp. 414–27.
- “Philosophy of Logical Atomism,” *The Monist* 28(1918), pp. 495–527, 29 (1919), pp. 32–63, 190–222, 345–80. Reprinted in *The Collected Papers of Bertrand Russell*. Vol.8 *The philosophy of Logical Atomism and Other Essays, 1914–19*. Slater, J.G.(ed.) London: George Allen & Unwin. 1986., pp. 157-244.[『論理的原子論の哲学』, 高村夏輝訳, ちくま学芸文庫, 2007年]
- The Collected Papers of Bertrand Russell*. Vol.7 *Theory of Knowledge: The 1913 Manuscript*, Eames, E.R. and Blackwell, K. (eds.) London: George Allen & Unwin. 1984.
- 高村夏輝 『ラッセルの哲学[1903–1918] センズデータ論の破壊と再生』, 勁草書房, 2013年.
- Whitehead, A.N. and Russell, B. *Principia Mathematica*. 3 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1910–1913.
- Wittgenstein, L. *Tractatus Logico-Philosophicus*, London: Routledge and Kegan Paul, 1922. [『論理哲学論考』, 野矢茂樹訳, 岩波書店, 2003年. 引用に際しては基本的に野矢訳を利用したが, 必要に応じて訳文を変更した.]